View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tsukuba Repository

<フォーラム>『アーバンスタディーズ』より「序論：都市の夜の地理」

著者	池田 真利子
雑誌名	地理空間
巻	11
号	2
ページ	51-70
発行年	2018-12-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156792

doi: 10.24586/jags.11.2_145

地理空間　11-2　145-164　2018

『アーバンスタディーズ』より「序論：都市の夜の地理」

(Introduction: Geographies of the urban night from *Urban Studies*)

池田真利子 訳
（日本学術振興会特別研究員PD，東京学芸大学）

【訳者解題】

本稿は，アメリカ SAGE 社の発刊する月刊学術査読誌『Urban Studies』52巻3号（2015年）に掲載された特集号「都市の夜の地理学」の巻頭論文を和訳したものである。同特集号には，「都市の夜」に関連する13本の論文が掲載された。巻頭論文である本稿の和訳に当たり，本訳者解題で同特集号の概要を示し，次いで巻頭論文・特集号に示されている議論を参照しつつ，世界および日本国内の夜間経済・ナイトライフ観光に係る議論の動向について若干の議論を行う。

同特集号の概要

特集号13本の論文のうち，巻頭論文を除く12本の論文題目・キーワード和訳と各調査国は，表1の通りである。なお，論文著者の発行年は同一のため，省略した。同特集号には「西ヨーロッパ（western Europe）」の事例が並び（イギリス5本，オランダ2本），その他に，カナダ，オーストラリア，インドネシアの事例も各1本含まれる。また，方法論を含む内容を概観すると，巻頭論文を含む3本が，夜の意味や光・闇といった表象に係る理論的アプローチを重視するが，残りの10本は実証的アプローチ，とりわけ行政や非営利団体，管理会社を含む夜間経済活動の担い手や利用客へのインタビュー調査という人文主義的アプローチをとる。ただし，この10本が事例研究であり，その他3本がそれらの理論的検証を行うというよりも，特集号全体が序論（論文1），「都市の闇（darkness）と夜の意味と経験の変化」（論文2・3），「夜間経済の発展」（論文4・5），「規制の強化」（論文6～8），「外出行為のダイナミクス」（論文9～12），および総論（論文13）の大きく四つの議論に収斂される。これは，本論文構成にも反映されており，Ⅳ～Ⅶ章では上記4点に関する先行研究や議論が，Ⅷ章ではそれとの関連において，巻頭論文を除く同特集号全12本の論文概要が記されている。そのため，巻頭論文を除く同特集号の12本の論文の概要は，Ⅷ章にまとめられている。論文構成は以下の通りである。夜の特別な場所（Ⅰ章），理論的考察（Ⅱ章），変化と既存研究（Ⅲ章），都市の闇と夜の意味と経験の変化（Ⅳ章），夜間経済の発展（Ⅴ章），規制の強化（Ⅵ章），外出行為のダイナミクス（Ⅶ章），論文（特集号の論文概要）（Ⅷ章）。以上より明らかなように，異なる調査地・題材・調査方法を扱った研究を，網羅的かつ端的にまとめている点においても，van Liempt et al.（2015）を参照する価値があるといえる。

表1 『アーバンスタディーズ』の「都市の夜の地理」に掲載された論文の概要

番号	論文著者	論文題目	論文キーワード	調査対象国
1	van Liempt et al.	イントロダクション：都市の夜の地理(Introduction: Geographies of the urban night)	統治，夜間経済，夜間空間，ナイトライフ，都市の闇	該当なし
2	Edensor	薄暗い都市：光と闇の関係性の再考（The gloomy city: Rethinking the relationship between light and dark）	建造環境，闇，光，北米，都市空間，西ヨーロッパ	該当なし
3	Brands et al.	夜間経済における犯罪への恐れと感情的曖昧さ（Fear of crime and affective ambiguities in the night-time economy）	曖昧さ，集合体，犯罪の恐れ，夜間経済，政治的介入	オランダ
4	Shaw	五時以降の人生：ニューカッスル・アポン・タインにおけるネオリベラルな夜の形成（‘Alive after five’: Constructing the neoliberal night in Newcastle upon Tyne）	地理学，ネオリベラリズム，夜間経済，都市ガバナンス，西ヨーロッパ	イギリス
5	Brands et al.	夜と都市：ジャカルタのクラブ，ブローテルとポリティックス（Night and the city: Clubs, brothels and politics in Jakarta）	都市，ガバナンス，インフォーマリティ，夜，秩序化	インドネシア
6	van Liempt	安全なナイトライフのコラボレーション：多様な主体と利害対立，そして権力の配分（Safe nightlife collaborations: Multiple actors, conflicting interests and different power distributions）	地理学，ガバナンス，ナイトライフ，安全性，西ヨーロッパ	オランダ
7	Middleton and Yarwood	キリスト教徒はここか？イギリスの夜間経済のポスト世俗空間におけるストリート牧師との遭遇（‘Christians, out here?’ Encountering Street-Pastors in the post-secular spaces of the UK’s night-time economy）	遭遇，夜間経済，ポスト世俗，宗教，ストリート牧師	イギリス
8	Hadfield and Measham	規制のアウトソーシング：飲酒の法的処置，プライベートセクターによる統治，そして夕刻・夜間経済(The outsourcing of control: Alcohol law enforcement, private-sector governance and the evening and night-time economy)	飲酒，コミュニティの安全性，法的処置，夜間経済，パブリックポリシー	イギリス
9	Pottie-Sherman and Hiebert	華々しい真正性：リッチモンド夜間市場の新現象にみる郊外文化と移民の探求（Authenticity with a bang: Exploring suburban culture and migration through the new phenomenon of the Richmond Night Market）	コミュニティ，地理学，夜間市場，夜間空間，北米	カナダ
10	Gallan	夜の人生：都市の夜におけるヘテロトピア，若者の遷移と文化的インフラストラクチャー(Night lives: Heterotopia, youth transitions and cultural infrastructure in the urban night)	文化的インフラストラクチャー，ヘテロトピア，音楽シーン，ライブハウス，夜，都市，若者の遷移	オーストラリア
11	Roberts	「ビッグ・ナイトアウト」：イギリスの夜間都市の「リモノイド」ゾーンにおける若者の飲酒，社会的実践と空間的経験（‘A big night out’: Young people’s drinking, social practice and spatial experience in the ‘liminoid’ zones of English night-time cities）	酒，イギリス，夜間，都市中心部，若者	イギリス
12	Hubbard and Colosi	夜を取り戻す？イングランドとウェールズにおける風俗エンターテイメントにおけるジェンダーと論争(Taking back the night? Gender and the contestation of sexual entertainment in England and Wales)	犯罪，ジェンダー，平等性，夜間，性産業，イギリス	イギリス
13	Hadfield	夜間都市．排除の4つのモード：アーバンスタディーズ特集号の省察(The night-time city. Four modes of exclusion: Reflections on the Urban Studies special collection)	文化的計画，夕刻・夜間経済，場所マネージメント，アーバンガバナンス	該当なし

ところで同論文は，オランダ・ユトレヒト大学の地理学者 van Liempt 博士・van Aalst 博士の2名と，イギリス・オックスフォード大学の地理学者 Schwanen 博士によりまとめられた。事例地域がイギリス・オランダに偏っているのはそのためであろう。とはいえ，両国は歴史的関係性においてのみならず，現在のナイトカルチャーや夜間経済においても深い繋がりを有する。特にオランダでは1998年にオランダ司法省により「ナイトライフ安全ガイドライン」が策定され，2002年までには中規模都市のほぼ半数においてナイトライフ安全協定が締結された（van Liepmt, 2015）。換言すれば，1990年代末までには地域社会において否定的影響力をみせる程にオランダのナイトライフ観光は既に発展をみせていたとも理解できる。こうしたナイトライフの安全政策の変遷と，ナイトライフ地区の監視や治安維持活動を巡る実証的・理論的研究が，巻頭論文筆頭著者ら2名の専門でもある。そうしたためか，社会科学系に属する同学術誌で特集

号をまとめるに当たり，理論的アプローチにも相当の注意が払われている。

時間－空間：社会科学と科学

「都市の夜の地理学」の方法論を考えた場合，同特集号では実証的研究，特にインタビュー調査が採用されていることは既に述べた。しかし，同特集号は「都市の夜」の意味に迫る。それらを理論的に収斂させるに当たり，著者らは社会科学としての地理学の側面に踏み込み，理論[1)]を補強する（Ⅱ・Ⅳ章）。

つまり，これは昼間（空間）－夜間（空間）を論じる場合に，どの物差し[2)]でそれをみるのか，あるいは，いかなる主体がみようとしているのか，ということに意識を向けることの重要性を示唆する。すなわち，夜間空間を所与の空間としてみた場合の研究（夜間経済の政治経済的研究やアクター・ネットワーク研究等の理論的研究が含まれる）のみならず，社会的に構築される／された夜間空間としての側面にも意識を向けることができることを示す。例えば，夜間経済の活性化を考えた場合，その実態や政策的変化は前者に，他方で，どういった主体により，どのように振興されるのかを考察することは後者に該当するであろう。著者らが述べるように，「夜間空間は，夜の闇のなかで，特定の場所において，何が発生して良くて，何が発生すべきではないのかの社会的なせめぎあい（social struggle）により構築されている」と考える視点が，実態解明よりもより大きな文脈を捉える可能性をもつ。

同時に，この視点は，夜間の社会空間の差異化が促される過程に注視することを促す。夜間経済活動の担い手が欧州社会において多様化したのは，近代以降のことであり，例えば女性は，飲酒に係ることのタブー意識を背景に，主に消費活動より疎外化されていた（Ⅶ章）。現代では，担い手が多様化しているように思われるが，例えばエスニック集団は，生産者・消費者として主流派（メインストリーム）のナイトライフ空間より周縁化され，エスノパーティという独自の経済活動と戦略的展開を行う。こうした研究は，現代社会における夜の時間－空間が日中の時間－空間の柵から解放されるような自由さ（開放性・匿名性）を提供する一方で（Ⅰ章），ジェンダーや階級，エスニシティ，年齢，性別などの要素における空間的差異化を，昼間の時間よりもより一層促しているのではないかという可能性を示唆する。

世界における夜間経済の台頭と日本における夜間経済の今後

用語としての夜間経済 Night-time economy は，イギリス・ロンドンに拠点を置く創造都市研究組織の Comedia Consultancy[3)]により1991年に発表された報告書，「時間外へ：イギリスにおける12の街の経済・社会・文化的ライフ（Out of Hours: A study of economic, social and cultural life in twelve town centres across the UK）」に起源をもつ（Shaw, 2014: Roberts, 2004）。同報告書では，イギリスの都市中心部が日中だけ賑わう商業に特化した場所へと変貌しつつあることに警鐘を鳴らし，夜間における都市中心部の積極的利用を促すことを意図していた。すなわち同語は，脱工業化時代の都市経済の活性化を意図する創造都市の文脈において創生されたものであり，1990年代初頭のアルコールや娯楽産業における規制撤廃の動きと関係する（Shaw, 2014）。

拙著で示したように，日本では夜間経済への注目が徐々に高まりつつあり，クラブなどの運営形態に係る法律が改正されるなど，規制緩和への動きも確認されている（池田，2017; 池田ほか，2018）。この規制緩和は，東京都が受動喫煙防止条例により，むしろ規制を強めつつあることとあわせて，プレ・オリンピッ

クにおける大都市の観光産業振興がその転機となっている。また，参議院本会議でのIR実施法案の可決（2018年7月20日）により，夜間経済や，その一つに位置付けられるナイトライフ観光など，都市の夜への注目が一層高まりつつある。

ところで，夜間経済に類する語として「24時間都市」がある。これは，1980年代から1990年代のバブル経済期（あるいはその直後）に，日本の大都市における都市経済活性化や都市開発の新しいトレンドとして議論された（岡，1986；水野，1993）。この時期に，ファミリーレストランの夜間営業を始めとして，夜間の消費・余暇活動が活発化した。例えば，港区・芝浦にあった倉庫街のロフト文化がそれに該当する。品川埠頭，大井埠頭等に大型コンテナ埠頭が形成されたことで，竹芝埠頭という小規模な物流基地としての役割は減退し，代わりに劇団の稽古場やギャラリー等が1980年代半ば前後に流入し，1980年代後半には遊休倉庫にライブハウス，カフェ・バー，ディスコ，スタジオ等が進出し，若者の求心力の高い流行発信地へと変化し，「ロフト文化」を醸成した（陣内，1989）。この芝浦の倉庫街は，それまで「夕方になると，怖くて近づけないようなところだった」が，ロフト文化が形成されて以降，夜のプレイスポットへと変化を遂げた（陣内，1989：214）。また，別の例に，六本木・赤坂の大規模再開発「アークヒルズ」[4)]が挙げられる。同再開発の経緯をまとめた全国市街地再開発協会（1987）によると，東京・ロンドン・ニューヨークの24時間のビジネス体制の需要を背景に，それに対応可能な，24時間稼働型のビジネス街づくりが必要となり，それが，開発指針となったという。また，こうした24時間経済は，24時間運用可能な関西国際空港の開港（1994年）により，関西圏においても一層加速するかのように思われた（岡，1986；水野，1993）。結局，バブル経済前後の都心部の地価高騰や，その後の経済停滞のなかで，「24時間都市」は都市開発のトレンドから外れていったが，オリンピック等のメガイベント誘致や，MICE観光，統合型リゾートを含む昨今の観光産業振興のなかで，再度，「夜間経済」として復活しつつある。それらが，1990年代に24時間都市をキーワードとして再開発に取り組んでいた湾岸エリアであることは，偶然とは思い難い。

都市の夜の地理学ーむすびに代えてー

本稿のキーワード「夜間空間（night-time spaces）」にあるように，学術的に看過されてきた夜の「時間－空間（time-space）」の視点は，空間の科学（時間地理学を含む）として戦後発展してきた地理学の科学的側面の強みを強調するものであると同時に，都市の夜・闇あるいは夜の規制緩和・強化に関する概念的・哲学的論考の可能性，そして夜間観光・夜間経済という都市経済としての研究可能性を示唆する。そのいずれもを対象とできるのが地理学の強みであろう。本論文の価値は，海外における夜間経済を巡る議論と様々な視点を紹介するだけではなく，日本におけるそれらの可能性の追求と，海外学術研究への貢献可能性を示唆する。

『地理空間』への投稿に当たり，van Liempt氏らにより執筆された巻頭論文を和訳した。日本でも脚光を浴びつつある夜間経済やナイトライフ，ナイトカルチャーを理解する一助となれば幸いである。訳出に際しては訳者の主観を極力排するため直訳を意識した。そのため，いささか理解しづらい箇所もあるかと思われるが，その場合には原典を参照して頂きたい。また，鍵概念や独特の言い回しに関しては，原著の英語を括弧内に併記するとともに，その解説を角括弧に記した。日本語には訳されていない概念についても概略を知ることができる。

［付記］

本稿は，筆頭著者を中心とした著者ら，および学術誌「Urban Studies」を出版するSAGE社により日本語の出版・公開に係る権利・了承を得た上で訳出した。英文著作権は筆頭著者およびSAGE社に帰属するが，日本語の著作権は訳者に帰属する。なお，本稿の一部に，笹川スポーツ研究助成（笹川スポーツ財団）［180A2-032］および科学研究費助成事業［17J02079］を用いた。

注

1） 主たる理論的根拠に挙げられているのは，アンリ・ルフェーブルの空間論，ミシェル・フーコーの統治論，そしてドゥルーズの集合体論（あるいはそこからデランダが発展させた集合体的論考assemblage thinking）である。なお，前2点に関しては，南後（2006）等に詳しい。ただし，著者らはフーコーの著作を文献に挙げておらず，それに関する直接的議論も行っていない。集合体（assemblage）（フランス語の原意で，配置arrangement，調整fixing，適合fittingを含む）は，ドゥルーズ哲学における鍵概念の一つであるが，同概念を巡っては過去10年に様々な解釈が生み出された（Kamalipiur and Peimani, 2015）。社会が様々な主体の複雑な相互作用により形成されているとみることが，この集合体の意味するところである。著者らは，夜間経済の監視主体（行政・警察・民間警備会社・民間非営利団体等）と監視媒体（監視カメラ・小型カメラ類）が様々な次元で相互作用を及ぼしながら監視を強める様相に迫る方法として，集合体的論考を用いている。なお，人文地理学における同概念の用法に関してはMcFarlane and Anderson（2011）に詳しい。これらは，都市の夜が競争の名目のもと，監視・管理の対象となる過程に迫る際に有効な枠組みを提示するとされている。

2） 産業革命以降に用いられたグリニッジ天文台を基準とする時間で示す夜の時間を指すのか，あるいはそれとは異なる，ある特定の社会・文化に根差す夜の時間を意味するのか，という意味である。

3） 同団体は，創造都市で著名なチャールズ・ランドリーにより1987年に発足されたコンサルティング会社である。

4） 同再開発計画は5.6haという民間として初となる最大規模の開発計画であり，着想から着工までに14年間の歳月を要した。

文　献

池田真利子（2017）：世界におけるナイトライフ研究の動向と日本における研究の発展可能性．地理空間，**10**(2)，67-84.

池田真利子・卯田卓矢・磯野　巧・杉本興運・太田　慧・小池拓矢・飯塚　遼（2018）：東京におけるナイトライフ観光の特性－夜間音楽観光資源としてのクラブ・ライブハウスに着目して－．地理空間，**10**(3)，149-164.

岡　並木監修（1986）：『24時間都市』地域科学研究会.

陣内秀信（1989）：『水辺都市江戸東京のウォーターフロント探検』朝日新聞社.

全国市街地再開発協会（1987）：『24時間都市ARK HILLS』工業調査会.

南後由和（2006）：アンリ・ルフェーブル－空間論とその前後－．加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房.

水野　稔（1993）：24時間都市の環境をめぐる諸問題－都市のヒートアイランドを中心に－．日本音響学会誌，**49**，832-838.

Kamalipiur, H. and Peimani, N. (2015): Assemblage thinking and the city: Implications for urban studies. *Current Urban Studies*, **3**, 402-408.

McFarlane, C. and Anderson, B. (2011): Thinking with assemblage. *Area*, **43**, 162-164.

Roberts, M. and Gornostaeva, G. (2004): The night-time economy and sustainable town centres: Dilemmas for local government. *International Journal of Sustainable Development and Planning*, **2**, 134-152.

Shaw, R. (2014): Beyond night-time economy: Affective atmospheres of the urban night. *Geoforum*, **51**, 87-95.

論文著者：van Liempt, Ilse.*, van Aalst, Irina.* and Schwanen, Tim.**
*ユトレヒト大学 Human Geography and Planning,
**オックスフォード大学 School of Geography and Environment

【要旨】
学術研究において夜が訪れるときに何が起こるのかは見落とされる傾向にある。本特集号のねらいは，いかにして夜行性の都市が生産され，使用され，経験され，規制されるのかを様々な地理学の文脈に位置付けることで，都市の夜の空間－時間を全面的に押し出すことにある。ローカルな多様性や特性がある一方で，都市の夜の時空間の構造における一定の傾向に関わる重要な類似性や現在進行形の変化が確認された。筆者らは同特集号を，都市の夜の研究における以下4点の重要な点に基づき構成した。①都市の闇（darkness）と夜の意味と経験の変化，②夜間経済の発展，③規制の強化，④外出行為のダイナミクス。様々な既存研究と理論的枠組みを持ち寄ることにより，本特集号は都市の夜間に関する相関的な視方を提供する。
キーワード：統治，夜間経済，夜間空間，ナイトライフ，都市の闇

Ⅰ　夜の特別な場所

夜間［時間］はこれまで都市学において，継続的に看過されてきた。人文地理学や社会学，計画学の大部分は，夜盲症（nyctalopia）であった。都市の日々の活動や日常生活の地理学において大抵支配的な言説であるのは日中［時間］である。夜が訪れるときに何が起こるのかということは学術研究において見過ごされやすい。本特集号のねらいは，いかにして夜行性の都市が創生され，使用され，経験され，規制されるのかを問うことを通して，都市の夜の空間－時間を全面的に押し出すことにある。関連論文の収集は，ゲストエディターにより組織された「都市の夜に関する地理」セッションのアイデアに触発されたものであり，一部は同セッション内容に基づく。同セッションは2011年4月にシアトルで開催された，アメリカ地理学会（AAG）の大会にて開催された。

夜間は，何が日中と異なるのであろうか。世界中の季節や緯度の違いによりもたらされる太陽光の存在や不在のことなのであろうか（Gallan and Gibson, 2011）。Robert Williams（2008）は，夜が太陽光の不在以上の存在であることを既に指摘している。彼は，夜の訪れとともに，「犯罪的行為や恋人たちの場所，新しい行動様式，あるいは反乱の組織化」にせよ，特定の活動や経験，そして可能性と関連する特別な雰囲気を創成する特定の時空間において様々な活動や感情が勢いを増すことを強調する（Williams, 2008: 518）。Murray Melbin（1978;1987）は，夜の社会学と地理学の先駆的研究であるが，夜間は様々な流れや都市の圧力が弛緩する結果，よりくつろいだ寛容的な社会的雰囲気をもたらすため，日中よりも夜に人間間の関係性が異なることを指摘した。彼の研究において，人間が日中の生活における衝突と匿名性から楽になり，単純に「夜を共有している」ため特別な結束感を感じると報告されている（Melvin, 1978: 16）。都市のナイトライフは，社会的交流の時間として，遊びの領域として，あるいは個人的な開拓のために自由な「誰でもない時間」として，または，友人関係や恋人，会話の時間として大いに潜在性を秘めている（Bianchini, 1995; Lovatt and O'Connor, 1995）。これら全ての要因は夜の社会的強みである。人間は，日中時間に通常押し殺している社交性と陽気さを表に出すことが許されるのである。

他の研究者はしかしながら，リラックスというよりも，人間が夜にもち得る強烈な感情的経験（e.g. Hubbard, 2005）－歓びや興奮，冒険から恐れや災難まで－を強調する。日中に比較して夜は，日中において許されない何者かになることを可能にし，会ってはいけない人に会う時間，あるいは両親がしてはいけないといったことをする時間を提供する（Lovatt and O'Connor, 1995）。バーやクラブの集まるナイトライフ地域は，日中には当然と考えられている社会的規範を逸脱する多くの機会が提供される，しばしば感情的な空間となる。したがって，ある種の暴力的犯罪や犯罪的損害，そして反社会的行為がそれらのナイトライフ地域内および周辺において集中するのは驚くことではない（Bromley and Nelson, 2002; Nelson et. al. 2001）。

Ⅱ　理論的考察

Henri Lefebvre（1991［1974］）の『空間の生産』は，いかにしてある種の活動（とりわけ違法な活動）が夜の特定の地域において許可されるようになったのかを説明しようと試みた先駆的研究である。Williams（2008）はLefebvreの枠組みを援用しつつ，夜間空間が社会的に調整され構成されていることを議論する。［すなわち］夜の空間が，闇を正し，管理しようとさえする人間の行為実践やそれに伴う社会関係に先駆けて存在している訳でも，あるいはそれから離れて存在している訳でもない。夜間空間は，夜の闇のなかで，ある特定の場所において，何が発生して良くて，何が発生すべきではないのかの社会的なせめぎあい（social struggle）により構築されている（Williams, 2008: 514）。Williamsにより支持されているルフェーブリアン［ルフェーブル派の人々］の見方は，夜の社会的構成（social construction）を理解するために非常に有益である。しかしながら，ナイトライフの生産は，アイデアや表象を巡るせめぎあい以上のものであり，本特集号の論文が証するように，他の理論的見方も都市の夜の社会的構成における生産性を明らかにするために援用可能である。これらが含むのは，もちろんそれだけに限定することはできないが，政治経済（Chatterton and Hollands, 2003; Talbot, 2004），集合体的論考（assemblage thinking）（Brands et. al. 2013; van Liempt, 2013），フーコディアン［フーコー派の人々］研究者（Gallan, 2013），アクター－ネットワーク論（Shaw, 2013），そして社会的実践および接点と循環（例を挙げるとEdensor, 2013; Middleton and Yarwood, 2013; Roberts, 2013）である。

統治（governance）の概念化は，都市の夜に関する研究においてより顕著である（例としてHadfield and Measham, 2014; Hadfield et. al. 2009; Tadié and Permanadeli, 2014）。後者において，Foucaultの概念である「統治性（govermentality）」と「生権力（biopower）」の考え方は特に有用である。これは，彼ら（フーコー派の人々）が，統治がいかなる主体［担い手］（agent）（そしてそれは行政とは限らない）によっても取って代られ得ることを強調し，そして**合理性**（rationality）－［すなわち］人間の健康とよく在ること，光と闇，グローバル世界における都市競争やその他諸々の，真実気味ており，そして権力の特定の形態を正当化する言説－や，よく在ることや競争の名の基で，都市の夜間空間（the night-time spaces）に介入するための**戦略**（strategies），さらに様々な主体－夜間のエンターテイメント施設を訪れる居住者や消費者だけではなく，警察や民間セキュリティー会社社員，起業家，そして公務員－の**主体化**（modes of subjectification）が彼らの，良くあること，そして／あるいは他人のそれ，そういった人々の集合体，そして都市の夜間

空間の名の基に，行動へと反映されること，［それら］の相互作用に注意を向ける（Rabinow and Rose, 2006）。この視点は，特に統治が，特定の（夜－間）空間において開かれ，あるいは詳らかにされるような共同体に限らず，ジェンダーや階級，エスニシティ，年齢，性別などの社会・空間的差異化（socio-spatial differentiation）の構築を促すような，不完全な過程かつ現在進行形の実践であるような場合において，都市の夜の統治ポリティックスを全面的に押し出すことを可能にする（Legg, 2011; Rutherford, 2007に同様の議論が確認される）。

とはいえ，各理論的枠組みが，不可避なまでに見えづらいテーマに直面して以来，いかなる理論的枠組みも，ア・プリオリに都市の夜を理解する特権を与えられなかった。多次元の無数の現在進行形の偶発的過程，しかもそれが安定し，そして変化する都市の夜間空間の形成［編制］（formation）に注視した，いかなる視点も有効とは思えない。したがって，本特集号では，様々な理論的枠組みに注目する。［本特集号の］論文は，都市の夜の複雑性と混沌，そしてローカルな地域の特異性に焦点を当てた。

Ⅲ　変化と既存研究

いかに夜間の都市が生産され，利用され，経験され，規制されているかにおいて，ローカルな多様性や特性があるにも関わらず，それと同様に，グローバル・ノース（the global North），また徐々にグローバル・サウスにおいても，－決して直線的［な増加］ではないものの－都市の夜の空間－時間の形成にみる長期的傾向において重要な類似性が確認される。これらの類似性は消費文化の台頭における過程の広範囲化や現在進みゆく商品化，発展するセキュリティー化，そして増大しつつあるトランス・ナショナリズム主義と「多様性を超えた（super-diverse）」都市に関する批判的考察を示唆する。都市の夜の文脈における関連する傾向として以下の点が挙げられる。

・都市の夜間経済のグローバル的拡張：元来，イギリスのポスト工業都市から始められた，経済機会と市中心［部分の］再活性化における都市の夜の（再）配置の戦略は，グローバル化する経済における都市競争の合理性に支えられており，ヨーロッパや北米，オーストラレージアにおいて着実に拡散しつつあり，そして今では修正された形ではあるが，グローバル・サウスの都市においてもそういった傾向がみられる（例えばジャカルタにて，Tadiė and Permanadeli, 2014）。

・過飲（binge-drinking）や中毒の様々な形態とそれに係る健康リスクに関するモラルパニックに反応して，夜間経済の行き過ぎた行為を抑制するための規制の増加（Hadfield et. al. 2009; Measham and Østergaard, 2009; Roberts and Eldridge, 2009），およびそれと同程度に「望まれざる」要素（攻撃的で暴力的な訪問者）の循環を阻止するため，また「望まれる」循環の形態を途切れさせないための（多くのお金を落とす消費者）の合理性や戦略の拡大

・グローバル・ノースにおける，消費やエンターテイメントの新形態の成長：何十年にもおよび，若者が都市の消費とエンターテイメントからなる夜間空間を「植民地化」してきたが，同［若者］集団は，グローバリゼーションと人間の移動の結果として徐々に多様化してきた。エスノパーティ（ethno-parties）と，グローバル・ノースのアジアの夜間市場の台頭は，ナイトライフの傾向のグローバル化の影響の良い例である（Hou, 2010; Pottie-Sherman and Hiebert, 2013）。

これらの長期的傾向は，都市研究の学術領域での都市の夜に関する既存学術的研究において議論され，検討されつつある。この，多分野にまたがる既存研究を把握するに当たり，我々は夜に関する四つの重要な研究重点を明らかにした。

(1)　都市の闇と夜の意味と経験の変化
(2)　夜間市場の発展
(3)　規制の強化，そして
(4)　外出することの実践におけるダイナミクス

Ⅳ　都市の闇と夜の意味と経験の変化

都市の闇（darkness）は長い間，否定的な表現－例えば，ダークサイドのように－で表され，そして「闇の力」は，啓発や明るさをもたらすものとは対照的なものとしてイメージされてきた。イルミネーションにより照らされた都市景観に関する研究，例えばEdensor and Millington（2009）やEdensor（2013）を除いて，学術的研究においても同様の傾向がみられる。電気は1880年代に都市の生活に組み込まれ，幾度にもわたって，近代のシティスケープに広がりをみせてきた。当初は裕福な人の住む高級住宅や顧客を魅了する狙いのある百貨店に限られていたが，公共道路の照明計画や主要輸送道路へと拡大していった。公共道路照明の台頭は都市の夜への新しい向き合い方において重要であった。道路照明は法と秩序の推進を意味した（Koslofsky, 2002）。照明を，恐れや犯罪が起こると皆が知っているとされる闇の場所（places of darkness）へともたらすことで，犯罪の解決策になると広く考えられており（Painter, 1996），照明は犯罪の発生危険性を低減するとされている（Pain et. al. 2006）。しかしながら，いかにしてナイトライフのエンターテイメント消費者が夜間外出するように途切れなく変化する状況において照明を経験しているのかに関してはほぼ知られていない（Brands et. al. 2013を参照）。

道路照明は，しかしながら，都市を美しくし，利便性を高め，夜の都市を使用する新たな期待を反映する。人工イルミネーションの連続的な技術発展により，夜への帳は開かれ，闇のフロンティアとして，より多様な空間を形成する社会実践は次第に減退していった（Melvin, 1987）。「暗闇にあり危険な冥府から，光り輝くカラフルなワンダーランドへ」と都市が変化することにより，近代の新しい景観が形成された（Nasaw, 1999: 6）。そのようなものとして，電気光は都市景観の「心理地理（phychogeography）」へと大きな影響を与えたのである（McQuire, 2005）。近代のイルミネーションはこのように，シティスケープの規制や，階層的選択，消費，幻想と想像の都市景観を生み出しながら，夜の都市の経験を変化させてきた。同時に，ローカルな地域や国家では，イルミネーションのリズムや時期が大きく異なることに注意が向けられるべきである（Edensor, 2010; 2012）。

こうしたリズムや時期は，なぜ，夜間対日中や闇対光，という単純な二元論がしばしば適切でなく，助けにならないのかの証左であるが，絶対的に対称とする立場が誤っているとする，さらなるより深淵な哲学的議論が存在する。Morris（2011）は，光と闇双方の有効性は光の闇への勝利において説明できないと主張する。光と闇は，双方のなかに存在する。さらに，闇とイルミネーションには対立的な価値が埋め込まれており，異なるように経験される。闇／光によりもたらされる意味や感情的経験は文化により異なり（Edensor, 2012），そして闇は矛盾する感情を生み出し，「動揺させるような降伏の感覚と，高揚させるような解放の感情」を創造する（Morris, 2011: 316にて引用されているHorlock）。ある者にとって静かな闇の場は，他の者にとって恐怖や疑念の場であろう

し，都市計画者やナイトクラブの所有者により経験されるような煌々と輝く消費空間は，周縁にいる集団によって監視と疎外の場と認識されていよう。闇と光の空間における人間の理解や経験について，明らかにされるべきものはいまだ多い。地理学において，景観に関するポスト現象主義的研究は夜の景観を関係論的に研究するうえで最適な学術領域である。

V　夜間経済の発展

都市中心部には必ず何らかの形で深夜のアメニティが存在するが，脱工業化以降，具体的な複数の政策がポスト工業都市を生まれ変わらせるため，また，潜在的なニューカマーの注意を引くように設計された（Chatterton and Hollands, 2003）。中央政府や地方政府に至るまで，行政権力の分散化をする必要から，都市は地域間の競争力を強化し，経済成長を刺激するために，より積極的になった（Hall and Hubbard, 1996; Harvey, 1989）。このネオリベラルな合理性と戦略は，伝統的なマス生産産業の利益縮退とケインズ主義者の福祉国家主義の危機に対応するための戦略的な政治として，1970年代後半から1980年代初頭までの間に広く認知されていった（Brenner and Theodore, 2002）。特にイギリスでは，「24時間都市（24 hour city）」の言説と戦略は，郊外化により引き起こされた「街を離れよう運動（out-of-town activities）」の急速な発展に直接的に関わっていた（Heath, 1997）。私的空間と郊外の家を基調とした活動に人々が移ることは，都市中心部のナイトライフが若者集団や売春婦，ドラッグ中毒者のような，残された集団や使用者に占有されることを意味していた（例えばLovatt and O' Connor, 1995）。「24時間都市」のコンセプトは安全性の欠如に悩まされ，かつ9時から5時までの間に職場・買い物をする場となっていたために衰退し，結果として廃れていた都市中心部において適用された（Heath and Stickland, 1997）。同戦略の基軸アイデアは訪問客を夕方から夜間にかけて都市中心部に呼び戻すよう魅了することであり，［同アイデアは］夜のナイトライフを再活性化しようとし（Bianchini, 1995），また夕刻経済（evening economy）を発展させようとする文化政策を発展させてきたヨーロッパ大陸都市の経験から得られたものであった。

「夜間経済（night-time economy）（NTE）」は，創造都市関連の組織であるComedia Consultrancy（1991: Shaw, 2014）による学術的業績に起源をもつ。同語は最初にイギリスの都市計画分野，特に北イングランドのポスト工業都市で最初に広く認知された。同概念は1990年代初頭の夜の飲酒・娯楽産業振興というより広いねらいで考案された（Bianchini, 1995; Shaw, 2014）。それまで，夜は経済的潜在性や市場価値に乏しい「死んだ（dead）」時間として広く認識されていた。1990年代にイギリスで現れ出たNTEを巡る言説は，都市の夜を，都市経済を「2倍」にせしめるものとした（Bianchini, 1995）。今日では，NTEの語はナイトライフと収益性および都市間競争といった用語間の関係性を自明視する（例えばShaw, 2010; van Aalst et. al. 2014）。既述のように，ネオリベラル化の戦略と消費における都市再投資といった社会経済的変化により，NTEの言説は，イギリスのみならず海外においても，政策策定者や都市戦略当局により利活用された。NTEの語は今ではバーやクラブ，映画館，劇場や文化フェスティバル，および夜間のイベントといった集合体を連想させる傾向にあり，それらは都市企業家の文脈において，都市再生やローカルな経済成長に寄与するものとして期待される。

NTEの潜在的利益に対する楽観的態度は，ある程度関心の高まりに置換された。まず1番目

に，Chatterton and Hollands（2003）は，多くのイギリスのナイトライフ地区が「マクドナルド化」，すなわち大型の著名店がダウンタウン地域の大部分を占め，顧客に徐々に標準化された体験を与える［ような場所となりつつあること］，を経験しつつあることを示した。低階層や非白人，非主流の呑み客がイギリスの中心部から排除されたことは，ナイトライフ関連施設の提供の均質化や，オルタナティヴな音楽を反映するエールハウスやヴェニュー－いずれも，比較的リスクが少なく，現金をもつ，学生や若いアーバンプロフェッショナルのような顧客を魅了することにより，最大利益をねらうような企業の担い手による，ブランド化と主流のナイトライフの「テーマ化（theming）」の結果として－といった伝統的コミュニティパブのようなナイトライフ空間の空間的商品化を反映する（Talbot, 2007: 批判の為にJayne et. al. 2008; Latham, 2003を参照のこと）。2番目に，夜間経済の推進はあらゆる場所で行われたが，都市中心部ではナイトライフ訪問客とジェントリファイアーである居住者間の葛藤，すなわち騒音とごみ問題に火をつける（Hae, 2012）。

3番目に，特定の社会集団が都市のナイトライフから社会的に排除されていることへの注目である（Boogaarts, 2008; Measham and Hadfield, 2009; Schwanen et. al. 2012; Valentine et. al. 2010）。階級や都市，エスニシティは，そうした社会的排除が起こる際の社会的差異化の鍵となる軸である一方，ローカル地域の権威による免許付与や音楽・飲み物，入場料の設定，あるいは入場に求められるもの，そしてオーナーによるマーケティング技術（例えばオンライン登録の利用や会員制戦略のような）は，「自発的な」規則と共に，排除がいかにして生み出されるのかを理解する重要な技術やメカニズムである（Boogaarts de Bruin, 2011; Measham and Hadfield, 2009; Schwanen et. al. 2012; Valentine et. al. 2010; Talbot, 2004）。排除のパターンと過程におけるさらなる研究とは別に，都市の様々な社会集団のためのナイトライフのアクセシビリティに関するさらなる研究－すなわち空間的アクセシビリティや［アクセス］能力，許容量，そしてバーやクラブ，映画館やその他ナイトライフエンターテイメント施設の適合性－が必要とされている。ここでもまた，階層や年齢，エスニシティ，あるいはジェンダーによる差異化に，空間的注意が注がれるべきなのである（後半に関して，Hubbard and Colosi, 2013; Schwanen et. al. 2012; Sheard, 2011を参照のこと）。

Ⅵ　規制の強化

なぜ，NTEに関する楽観的態度が抑制されてきたのかに関する最後の理由は，過飲や薬物の利用，そして関連する健康リスクが，大衆紙および学術誌の特定領域双方において道徳の危機的状況とされたことと関係がある（Hadfield et. al. 2009; Measham and Østergaard, 2009; Roberts and Eldridge, 2009）。夜間に外出する人間は，酒を飲み，騒音を出し，破壊行為に及び，集団でたむろする，といった否定的な文化的集団（cultural signifier）として，言説において徐々に問題視されるようになった（Bromley and Nelson, 2002; Jayne et. al. 2008; Roberts and Eldridge, 2009）。酒を飲むことの健康示唆に関して深遠な知識は（Jayne et. al. 2011; Measham and Østergaard, 2009），都市のナイトライフの過度の消費に関するある種の懸念を，政治家や学者，ジャーナリスト，政策策定者や保護者のような［立場の］人々の間に増大させた（Hadfield et. al. 2009; Roberts and Eldridge, 2009）。結果として，都市の夜は徐々に，慣習に逆らった反社会的行動の空間－時間として徐々に表現され，それは規制されるべきものとされた。取り締まりや無秩序，飲酒，そし

て反社会的行動は，過去20年にわたり，夜の空間の規制における中心的位置を占めた（Crawford and Flint, 2009; Hobbs et. al. 2003; Talbot, 2004）。

無秩序，反社会的行動と都市のナイトライフの「アルコール化（alcoholisation）」は，革新的，刺激的，創造的であり，生活や旅行先，遊び消費する先として安全な場所でいたいと願ういかなる都市においても危険を構成する（Bannister et. al. 2006; Harvey, 1989; Helms, 2008; van Liempt and van Aalst, 2012）。アーバンルネッサンスの合理性において，生活・消費において安全かつ居心地の良い場所とされている都市の中心部は，それ故に，ナイトライフ地区（nightlife district）と関連付けられがちな暴力や飲酒に関係する問題を巡る物語と競合するのである（Eldridge, 2010）。前述の統治性や生権力に関する理論的な視点は，いかにして合理性が競争し，相互作用するのかを詳らかにする助けとなる。なぜならば，これは，都市の夜間空間をよりよい場所とする，あるいはそういった合理性が位置合わせし，相互に強化するように競争するという名目のもと，［都市の夜間空間に］介入するための戦略の段階［で発生するの］だからである。多くの都市において，暴力と無秩序の合理性に続いて起こる技法（techniques）は，よく在ることと競争の合理性を引き合いに出しながら合法化される（Helms, 2008も参照のこと）。

統治性と生権力の視点は，ヒト，モノ，情報と資本の流れとモビリティの促進が「強く望まれて」いるものであり，（そうした）循環において「リスクのある」形態はブロックし避けるべき（後者はウィルスやテロリスト，サブプライム住宅ローンから物乞いやホームレスに至るまで）というより広い戦略を背景に，夜間経済の規制の強化を強調する。これらの安全上の戦略は，ありとあらゆる種類の境界を含む様々な場所で（Adey, 2009; Amoore, 2006; Bigo, 2002），そして都市のショッピングモールやレジャー複合施設，またナイトライフ地区といった消費の都市空間において立ち現れる。Bigo（2002）およびフーコーに影響を受けた学者によると，現在起こっていることは，これまで存在していた脅威や不安要素に関係しているのではなく，広く異種の社会的集団（social actors）の集まりに関わる過程における彼らの積極的な構築と決定に関係する。NTEの文脈において，これは，例えばナイトクラブで使用されているような，技術的に発展したCCTV（監視カメラ）システムや自動顔認証スキャナーのような新しい監視形態の始まりと防止用の安全策に帰結し，「望まれざる［人間］」を締め出し，夜間のエンターテイメントの客，それが個人であろうと集団であろうと，健康だとかより良くあることといった，（地域）州や警察，公共衛生局といった権威側の言説に埋め込まれた社会コードと合致した行動を求める。また，恐怖や不安感情およびストレスの減少により，人間がお金を消費するよう促す。関係各所の人間が，どういった人間やどういったもの（こと）がナイトライフ地区において「望まれざる」のかを徐々に口にするように，あるいは決定するようになっており，［それは］より予防方策へと移行し（Koskela, 2003），終いにはナイトライフ地区における望まれざる客のカテゴリーを押し広げ，より多くの人間が監視の対象となるのである。

Ⅶ　外出行為のダイナミクス

NTEの成長と，都市において外出すること，あるいは夜を楽しむことに対する公的需要の増加は，既述の広い社会経済的変化と経済の再編のみに起因するものではなく（Chatterton and Hollands, 2003），（拡大しつつある）人生の一時期としての若者時代の構造変化も重要な社会の変化であり，つまりナイトライフのエンターテ

イメントが若者のアイデンティティの構成に非常に重要になりつつあることを意味する（Cattan and Vanola, 2013; Chatterton and Hollands, 2003; Hollands, 1996）。しかしながら，現在の若者に起源をもつナイトライフでは，比較的新しい消費者集団が確認される。

まず，学生は特定のインナーシティのナイトライフ地区において重要性を増しつつあり，支配的集団である。大学入学の民主化と高等教育への拡大が1960年代に始まって以降，学生数は明確に増加した（Chatterton, 1999; Chatterton and Hollands, 2002）。「ストゥデンティフィケーション（studentification）」（Hubbard, 2008; Sage et. al. 2013）は多くのイギリスの都市で確認されている現象である。これは，特定の地域（neighbourhoods）が学生居住者により占有される，そして学生のみ利用可能なナイトライフ施設や「学生限定ナイト（students only night）」，あるいは学生の為のパブといった，学生や彼らに特徴的なライフスタイルに変化するプロセスである。学生は時折，メディアにより表象されるステレオタイプにより，ナイトライフにおいて問題の多い立場にある。地域の居住者は学生集団の存在により，充填問題（problem of pre-loading）［外出前にアルコールを大量に消費する行為］，騒音，物損，嘔吐，放尿に悩む地域社会を弱体化させるとしばしば批判する（Hubbard, 2008; Sage et. al. 2013）。

2番目に，Boogaarts de Bruin（2011），Böse（2005），Kosnick（2008），Measham and Hadfield（2009），Talbot（2008）およびValentine et. al.（2010）は，エスニシティが都市のナイトライフ地区における重要な隔たりを示すとした。エスニックマイノリティの周縁化は入場の際のコード，会員制戦略やドア（入場を管理する）職員の差別により発生する。黒人音楽の犯罪化や黒人音楽ナイト［イベント］の人種的なステレオタイプに基づく開催拒否は，その一例を示す（Talbot, 2007）。オランダにおけるエスニッククラブユーザー（clubber）［クラブを習慣的に訪れる人々］に関する研究では，オランダ系トルコ人の若者が所属と安全性が担保できないためにナイトライフのメインストリームからしばしば外れることを明らかにした（Boogaarts de Bruin, 2011）。そしてイギリスでは，禁酒文化が都市中心部の夜間経済から多くのムスリムの若者を遠ざける傾向にあることが明らかとなった（Valentine et. al. 2010）。他方で，現在の都市部のクラブクーザ―の文化的多様性やエスニシティの多様性の増加は，いくつかのクラブにおける新しく多様性に富んだプログラムを提供する新しい戦略展開をもたらしつつある。パーティを自分達でアレンジする代わりに，クラブは徐々に彼らの場所を外部の企業やDJ集団（DJ collectives）に貸し出す。これらDJ集団はクラブに自らのネットワークを持ち混むため，パーティの新しい形を成功させるには比較的容易である。このクラビング（clubbing）を巡る景観の変化により，エスニックイベントの組織が人気のあるクラブで，いわゆるエスノ・パーティ（ethno-parties）を開催することが可能となった（Boogaarts de Bruin, 2011）。

最後に，女子と女性は夜間エンターテイメントとレジャー空間の消費者として以前より多くの人数が確認されている（O'Brien et. al. 2009）。彼らは，以前の世代の女性よりも可処分所得が高く，また母親になる選択を遅らせる女性も徐々に増加している。ここ数十年において，飲酒はより広く許容され，女性が見える場所で飲む傾向にある一方で，飲酒文化が大きく異なり，そのパターンは，ローカルやナショナルなレベルの伝統に根差すことも知られるべきである（Eisenbach-Stangel and Thom, 2009）。

同時に，アルコール消費は近年，グローバル・

ノースの多くの国々で問題化されつつある。過飲は道徳の危機的状況とされるなかでも突出しており，女性はここで注視される。アルコールの消費は許容せざる態度としてみなされ，10代の女子や20代の女性が関わっていると道徳上の罪としての感覚が強まるのである。Hubbard（2008）によると，そういったアルコール消費のジェンダー化におけるダブルスタンダードな状況は，飲酒において男性よりも女性の方がより恥とされることを示す。若い女性が都市のナイトライフの特徴の雰囲気の変化にもたらす影響は，肯定的意味においても否定的意味においても大きい（Chatterton and Hollands, 2003）。Hubbard（2008）は「オルタナティヴ」なナイトライフ施設が特に女性に対し，歓びと興奮を共に求めるような肯定的な女らしさを高めることのできる快適な空間を提供することを示した。しかし同時に，ある種の傾向－つまり，特にメインストリームのクラブでは，男性にとって女性は性の対象かあるいは「肉」なのである（Anderson, 2009; Hubbard, 2013）。

これらクラブユーザーの比較的新しい3類型は，都市のナイトライフが全て一つの経験から成る単一の文化的形態として同一視できないことを示す。Anderson（2009: 919）はグローバル・ノースの様々な場所で起こる夜間経済が，非常に様々なイベントやナイトライフ施設の多様性を特徴づけることを明らかにした。彼はナイトライフが様々な層をもつと結論付けている。一方では，Chatterton and Hollands（2003）が「ブランド化された景観（brandscapes）」と名付けた，大衆的でメインストリームの音楽を流す商業的な場所メイン通り（high streets）がある。他方では，より小さく，独立したナイトライフ空間が都市の外れ－「アンダーグラウンドシーン（underground scenes）」に存在する（Gallan, 2013）。多くのナイトライフ施設はしかしながら，二つの極の間のどこかにある。外出すること，夜間空間に関するナイトライフ施設およびサブカルチャーやシーンパターンに関する同質性や複雑性に関するさらなる研究が求められる。

Ⅷ　論文

本特集号の狙いは，進みつつある現在の都市の夜の空間－時間変化がいかにして生産され，利用され，経験され，制御されるのかを様々な地理学的文脈に当てはめ，理解を深めることにある。4点の論文を結びつけることで－都市の闇と夜の変化の意味や経験，夜間経済の発展，規制の強化と外出する実践のダイナミクス－都市の夜に関する相関関係的視点を提供した。本特集号の個々の論文は，少なくとも一つの視点からこれら変化を検証したが，何点かの論文はサブテーマにおいてそれぞれ関係する。既に説明したように，本特集号は様々な理論的視点からそれらの変化を検証するのである。

一連の論文は既存の研究を様々な方法に押し広げた。これら論文は夜間経済に関する研究の近年の傾向を，イギリス以外にも様々な地理的設定において解釈した。大陸ヨーロッパや（Brands et. al.; van Liempt），北アメリカ（Pottie-Sherman and Hiebert），オーストラリア（Gallan），およびジャカルタ（Tadié and Permanadeli）の論文を含む。したがってこれらの論文は，広い枠組みでの理論的研究の潜在性をみており，一見異なってみえる複数の都市や国を巡る革新的で批判的な兆候を－例えばジャカルタではインフォーマル［な集団］が重要な役割を担うのに対し，イギリスやオランダの都市ではフォーマル経済と広大な規制が支配的であるといった比較－を検討するが，しかしそうした個々の経験がオリエンタルを巡る問題を抱えていることもみるのである（Robinson, 2010）。複数の論文から得られる本質的知見は，

すでに強調した三つの変化－夜間経済の空間的拡大，増加する規制，グローバル・ノースにおける消費の新しい形態の発現－が何となく発生しているわけではない，ということである。地理学者が都市の夜以外の学問領域に対して議論してきたように，空間は一般的過程の背後にある受け身の背景幕ではない。それは差異化に関わる積極的営為であり，都市の夜間空間の生産や使用，経験，規制に係る理論化をする際には，一般性と特殊性，普遍性と文脈の特殊性の均衡が意識されるべきであると訴える。

論文は，都市の夜間空間が形成される際のアクターやステークホルダーに様々な幅があることも考察した。これらにはローカル［地域］の行政機関も含まれており（Edensor; Hadfield and Measham; Hubbard and Colosi; Shaw; van Liempt），バーやクラブ，そして他のエンターテイメント施設のオーナーや顧客（Hadfield and Measham; Shaw），公共・民間の監視企業（Brands et. al.; van Liempt），信念を貫く組織（Middleton and Yarwood），そして無論，様々な形態のナイトライフエンターテイメントの消費者も含む。後者に関して，学生そして／または白人の若者（Brands et. al.: Roberts），あるいはライフコースのその後の段階にいる人間のみならず（Gallan），Pottie- Sherman and Hiebertの論文にあったように，特定のエスニック背景を有する消費者にも焦点が当てられている。

本特集号は実質的に11の論文から構成されており，これらは既に確認し，紹介したように，四つの広いテーマに分類されるが，これを［改めて］以下にまとめる。最後の論文であるPhil Hadfield（2014）には，個人の発表だけではなく，本特集号の総括が記載されている。

都市の闇と夜の意味と経験の変化

Edensorは彼の論文において，闇への恐れが，より肯定的な夜間の性質や経験へと歴史的・文化的にシフトしていると述べる。彼は，夜と昼間を対立概念として捉えるよりも，それらの関係論的状況を理解する方が，より生産的かつ現実的であるとする。こうした理解の重要性は，オランダのナイトライフ地区の街灯に対する若い夜間経済の消費者の対応を分析したBrands，Schwanen，van Aalstの論文にもみられる。これらの著者らは，街灯に対する理解［そのもの］が曖昧であり，［そういった理解が］街灯に出くわした際の人間，あるいは人間以外の集合体にも依ることを指摘する。

都市の夜間経済の発展

現在振興する夜間経済の発展はShawの論文の中核を成す。彼は，就業時間の終わりと夜間経済の開始の間にある差を埋めることが，長い間，イギリスの多くの都市において，いかに都市の夜間政策戦略の金の卵を産むガチョウ［際限なく利益を生むもの］とされてきたのかを描いた。「5時以降，活動する（Alive after Five）」という，より多くの人に夜の都市を利用してもらうことを推奨するための営業時間の延長を事例に，ShawはNewcastle-upon-Tyneにおける同計画や翻訳，そして実践を，アクター・ネットワーク理論とイギリスにおけるネオリベラリズムの政治経済に関する考察から明らかにした。Tadié and Permanadeliは，夜に関するネオリベラル的考え方はイギリスのみならず，グローバル・ノースを超えて，例えばジャカルタのナイトライフ地区で確認されることを示した。同著者らは，ジャカルタの現代性を証明するために国際的な基準が適用されるとき，いかにして都市のいくつかの施設が世界のそれらに似ているのかを検証した。しかし同時に，都市

のナイトライフ地区の統治と規制が，ローカル地域の文脈により介在され，領域と関係において特殊なタイプを生み出す。高度にインフォーマルなレベル［の規制］（インドネシアのペネルティバン（penertiban））は，例えば，都市が－そして夜間都市が－秩序付けられ規制されているのかの過程において特徴を示す。加えて，ジャカルタでは，イスラム教による圧力のなか，モラルと宗教が政府の動きに影響を与え始め，都市の中心的なナイトライフ地区から「罪」を取り除くこと，これが現在の公の言説となっている。

規制の強化

van Liemptは，彼女の論文において，いかに都市の夜の統治過程に関わる主体（agents）が多様性を増しているのかを提示した。規律と監視は通常一連の主体により行使されることはなく，忠誠や集合体（assemblages）から現れる。「安全なナイトライフポリシー（safe nightlife policies）」と称されるものは，監視集合体において様々な主体が協働し，責任を負うような，「統合された」ローカル地域の安全ポリシーのより広い文脈に適合する。Brands，SchwanenとvanAalstは若い夜間経済の消費者による警察，警備員，無線カメラのような治安方策に対する反応は曖昧であることを示した。著者らは被験者の間で，道路でパトロールを行う警察官の数と，彼らが持ち運ぶ機器が様々な反応を誘発し，可視的な警察の存在が犯罪の恐れを減少させるのか高めるのかが不明であることを明らかにした。「ハードな」取り締まり技術は将来的な危険の兆候として予測され，「ソフトな」取り締まりは一般的に好意的に受け取られる。Middleton and Yarwoodはイギリスの複数のナイトライフ地区のモニタリング調査において，ある特定の「ソフトパートナー」－ストリート牧師－の存在を明らかにした。こうした信仰に基づく規制は，2003年に明らかにされたものであるが，深夜の都市において自立が困難な，あるいはタクシーを見つけられずにいる，あるいはハイヒールで歩くことができなくなった若いクラブユーザーに注意を払う。そうしたストリート牧師はインフォーマルな形で，夜間のクラブユーザーが良く在ること，に寄与する。HadfieldとMeashamは彼らの論文でいかに規制者と規制される者の間で折衝が行われているかを明らかにした。彼らは，コンプライアンスの折衝が，信頼や，犯罪に対する知能と効率的な反応を高めるかを示した。しかし，これらの折衝は，実際の文化的変化の障壁となるような，自己満足や怠惰，規制の虜をも生み出す。

外出する実践のダイナミクス

NTEの研究における地理的多様性のほかに，いくつかの都市における夜間経済において，私たちは消費とエンターテイメントに新しい形態が生じていることを発見した。Pottie-ShermanとHiebertは，カナダの郊外における中国人夜市場の研究において遷移するナイトライフの興味深い事例を提供する。ディアスポラ文化の一側面が，夜の6時以降に静寂なRichmondの景観と対照的な中国の「始まりの遅い」文化と，あからさまに対照的なように，バンクーバーの郊外における現実生活と非常に不釣り合いである。

単なる経済以外のことも都市の夜に起こるのであり，それは他者に会うこと，アイデンティティを創生すること，そして楽しむことに関することでもある。Gallanはナイトライフ空間が都市において重要であること，また若者のサブカルチャーや音楽の嗜好にとっても重要であると推測する。同論文はフーコーのヘテロトピア（Heterotopia）の一時性の理解を，商業空間の複雑性と経験を描写することで再検証する。著者は，事例研究に基

づき，オーストラリア都市ウロンゴンにおけるオックスフォード［地名］のタヴェルナ［酒場］に外出することが，重要な「通過儀礼（rites of passage）」として経験され記憶される時空間と成り得るのかを明らかにした。同様に，Robertsの論文は「ビック・ナイトアウト（big night out）」［イギリスで2012年より放映されているドキュメンタリー番組の名称］の社会的実践に関するものであるが，外出の地理学における研究に興味深い方向性を付与する。同論文は，二つの異なるイギリスの地域において，若い（主流派の）人々が夜の都市中心部が「彼らの」空間－時間であり，彼らの「儀式」（酒の事前充填，飲酒，梯子酒，ダンス，夜間の飲食）のために文化的，経済的に承認された場だと理解する過程に関する研究に基づき，飲酒経験や文化，雰囲気の生産が形成される際に空間性が重要な役割を担っていることを示した。いわゆる「飲酒回路（drinking circuits）」において，人間が同様の行動をする環境において，認められ，一目置かれるといった，領域性［に係る］感情が非常に重要となる。

最後に，Hubbard and Colosiは，イギリスとウェールズの夜間の都市におけるジェンダーの方向性を探索した。彼らは都市中心部にある「ジェントルマンのクラブ」の存在が夜間経済におけるジェンダー化の性格を示し，また空間－時間が女性を男性の消費のために展示することによる男性の性的まなざしの特権化の継続を可能とすることを強調する。こうしたクラブの撤去は，よりジェンダーにおいて平等な都市の創造のための重要なステップとしていくらかの人々により支持されてきたが，これはナイトライフへの女性のアクセスが男性［側］の条件下でのみ可能になるという，長期的な思い込みに疑問を投げかけている。

注

1） 統治性と生権力は現代の社会科学において様々な意味で理解されている。フーコー自身が，行為の統制（conduct of conduct）」（Gordon 1991: 2）－他者と／あるいは，自身の行動を形成する様々な主体による活動－そして他者やその者を支配する特別な形態を含む（ことを意味する）というように，前者を様々な意味で理解している。生権力は通常，「人間の存在の基本的特徴に介入しようとする多かれ少なかれ正当化された意図を含む領域」と定義されている（Rainbow and Rose 2006: 197）。

文　献

Adey, P. (2009): Facing airport security: Affect, biopolitics, and the preemptive securitization of the mobile body. *Environment and Planning D: Society and Space*, **27**: 274-295.

Amoore, L. (2006) Biometric borders: Governing mobilities in the war on terror. *Political Geography*, **25**: 336-351.

Anderson, T. (2009) Better to complicate, rather than homogenize, urban nightlife: A response to Grazian. *Sociological Forum*, **24**: 918-925.

Bannister, J., Fyfe, N. and Kearns, A. (2006): Respectable or respectful: (In)civility and the city. *Urban Studies*, **43**: 919-937.

Bianchini, F. (1995): Night cultures, night economies. *Planning Practice and Research*, **10**:121-126.

Bigo, D. (2002): Security and immigration: Toward a critique of the governmentality of unease. *Alternatives*, **27**: 63-92.

Boogaarts, S. (2008): Claiming your place at night: Turkish dance parties in the Netherlands. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, **34**:1283-1300.

Boogaarts de Bruin, S. (2011): *Something for Everyone? Changes and Choices in the Ethno-PartyScene in Urban Nightlife*. Amsterdam: Amsterdam University Press.

Böse, M. (2005): Difference and exclusion at workin the club culture economy. *International Journal of Cultural Studies*, **8**: 427-444.

Brands, J., Schwanen, T. and van Aalst, I. (2013): Fear of crime and affective ambiguities in the night-time economy. *Urban Studies* **52**: 439-455.

Brenner, N. and Theodore, N. (2002): Cities and the

geographies of 'actually existing neoliberalism'. *Antipode*, **34**: 349-379.

Bromley, RD. and Nelson, AL. (2002): Alcoholrelated crime and disorder across urban space and time: Evidence from a British city. *Geoforum*, **33**: 239-254.

Cattan, N. and Vanola, A. (2013): Gay and lesbian emotional geograhies of clubbing: Reflections from Paris and Tunis. Gender, *Place and Culture*, **21**: 1158-1175.

Chatterton, P. (1999): University students and city centres – The formation of exclusive geographies: The case of Bristol, UK. *Geoforum*, **30**: 117-133.

Chatterton, P. and Hollands, R. (2002): Theorising urban playscapes: Producing, regulating and consuming youthful nightlife city spaces. *Urban Studies*, **39**: 95-116.

Chatterton, P. and Hollands, R. (2003): *Urban Nightscapes. Youth Cultures, Pleasure Spaces and Corporate Power.* London and New York: Routledge.

Comedia Consultancy (1991): *Out of Hours: A Study of Economic, Social and Cultural Life in Twelve Town Centres in the UK*. London: Comedia.

Crawford A and Flint J (2009) Urban safety, anti-social behaviour and the night-time economy. *Criminology and Criminal Justice*, **9**: 403-414.

Edensor, T. eds. (2010): *Geographies of Rhythm; Nature, Place, Mobilities and Bodies*. Aldershot: Ashgate.

Edensor, T. (2012): Illuminated atmospheres: Anticipating and reproducing the flow of affective experience in Blackpool. *Environment & Planning D: Society and Space*, **30**:1103-1122.

Edensor, T. and Millington, S. (2009): Illuminations, class identities and the contested landscape of Christmas. *Sociology*, **43**: 103-121.

Edensor, T. (2013): The gloomy city: Rethinking the relation between light and dark. *Urban Studies*, **52**: 422-438.

Eisenbach-Stangl, I. and Thom, B. (2009): *Intoxication and Intoxicated Behaviour in Contemporary European Cultures*. Vienna: European Centre for Social Welfare Policy and Research.

Eldridge, A. (2010): Public panics: Problematic bodies in social space. *Emotion, Space and Society*, **3**: 40-44.

Gallan, B. (2013): Night lives: Heterotopia, youth transitions and cultural infrastructure in the urban night. *Urban Studies*, **52**: 555-570.

Gallan, B. and Gibson, C. (2011): New dawn or new dusk? Beyond the binary of day and night. *Environment & Planning A*, **43**: 2509-2515.

Gordon, C. (1991): Governmental rationality: An introduction. In Burchell, G., Gordon, C. and Miller, P. eds. *The Foucault Effect: Studies in Governmental Rationality*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1-51.

Hadfield, P. (2014): The night-time city. Four modes of exclusion: Reflections on the Urban Studies special collection. *Urban Studies*, **52**: 606-616.

Hadfield, P. and Measham, F. (2014): The outsourcing of control: Alcohol law enforcement, private sector governance and the evening and night-time economy. *Urban Studies*, **52**: 517-537.

Hadfield, P., Lister, S. and Traynor, P. (2009): 'This town's a different town today': Policing and regulating the night-time economy. *Criminology and Criminal Justice*, **9**: 465-485.

Hae, L. (2012): *The Gentrification of Nightlife and the Right to the City: Regulating Spaces of Social Dancing in New York*. New York: Routledge.

Hall, T. and Hubbard, P. (1996): The entrepreneurial city: New urban politics, new urban geographies?. *Progress in Human Geography*, **20**: 153-174.

Harvey, D. (1989): From managerialism to entrepreneurialism: The transformation in urban governance in late capitalism. *Geografiska Annaler Series B: Human Geography*, **71**: 3-17.

Heath, T. (1997): The twenty-four hour city concept – A review of initiatives in British cities. *Journal of Urban Design*, **2**: 193-204.

Heath, T. and Stickland, R. (1997): The twenty-four hour city concept. In Oc, T. and Tiesdell, S. eds. *Safer City Centres: Reviving the Public Realm*. London: Paul Chapman, 170-183.

Helms, G. (2008): *Towards Safe City Centres? Remaking the Spaces of an Old Industrial City*. Aldershot: Ashgate.

Hobbs, D., Hadfield, P., Lister, S. et al. (2003): *Bouncers: Violence and Governance in the Night-Time Economy*. Oxford: Oxford University Press.

Hollands, P. (1996): From shipyards to nightclubs: Restructuring young adults' employment, household and consumption identities in the north-east of England. *Berkeley Journal of Sociology*, **41**: 41-66.

Hou, J. (2010): 'Night market' in Seattle: Community eventscape and the reconstruction of public space.

In Hou, J. eds. *Insurgent Public Space: Guerrilla Urbanism and the Remaking of Contemporary Cities*. New York: Routledge, 111-122.

Hubbard, P. (2005): The geographies of 'going out': Emotion and embodiment in the evening economy. In Bondi, L., Smith, M. and Davidson, J. eds. *Emotional Geographies*. Aldershot: Ashgate, 117-137.

Hubbard, P. (2008): Regulating the social impacts of studentification: A Loughborough case study. *Environment and Planning A*, **40**: 323-341.

Hubbard, P. (2013): Carnage! Coming to a town near you? Nightlife, uncivilised behaviour and the carnivalesque body. *Leisure Studies*, **32**: 265-282.

Hubbard, P. and Colosi, R. (2013): Taking back the night? Gender and the contestation of sexual entertainment in England and Wales. *Urban Studies*, **52**: 589-605.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, SL. (2008): Geographies of alcohol, drinking and drunkenness: A review of progress. *Progress in Human Geography*, **32**: 247-263.

Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, SL. (2011): *Alcohol, Drinking, Drunkenness: (Dis)Orderly Spaces*. Aldershot: Ashgate.

Koskela, H. (2003): 'Cam era': The contemporary urban panopticon. *Surveillance and Society*, **1**: 292-313.

Koslofsky, C. (2002): Court culture and street lighting in seventeenth-century Europe. *Journal of Urban History*, **28**: 743-768.

Kosnick, K. (2008): Out on the scene: Queer migrant clubbing and urban diversity. *Ethnologia Europaea*, **38**: 19-30.

Latham, A. (2003): Urbanity, lifestyle and making sense of the new urban cultural economy: Notes from Auckland, New Zealand. *Urban Studies*, **40**: 1699-1724.

Lefebvre, H. (1991［1974］): *The Production of Space*. Oxford: Basil Blackwell.

Legg, S. (2011): Assemblage/apparatus: Using Deleuze and Foucault. *Area*, **43**: 128-133.

Lovatt, A. and O'Connor, J. (1995) Cities and the night-time economy. *Planning, Practice and Research*, **10**: 127-134.

McQuire, S. (2005): Immaterial architectures: Urban space and electric light. *Space and Culture*, **8**: 126-140.

Measham, F. and Hadfield, P. (2009): Everything starts with an 'e': Exclusion, ethnicity and elite formation in contemporary English clubland. *Adicciones*, **21**: 363-386.

Measham, F. and Østergaard, J. (2009): The public face of binge drinking: British and Danish young women, recent trends in alcohol consumption and the European binge drinking debate. *Probation Journal*, **56**: 415-434.

Melbin, M. (1978): Night as frontier. *American Sociological Review*, **43**: 3-22.

Melbin, M. (1987): *Night as Frontier: Colonizing the World after Dark*. New York: Free Press.

Middleton, J. and Yarwood, R. (2013): 'Christians, out here?' Encountering street-pastors in the post-secular spaces of the UK night-time economy. *Urban Studies*, **52**: 501-516.

Morris, N. (2011): Night walking: Darkness and sensory perception in a night-time landscape installation. *Cultural Geographies*, **18**: 315-342.

Nasaw, D. (1999): *Going Out: The Rise and Fall of Public Amusements*. Boston, MA: Harvard University Press.

Nelson, A., Bromley, R. and Thomas, C. (2001): Identifying micro-spatial and temporal patterns of violent crime and disorder in a British city centre. *Applied Geography*, **21**: 249-274.

O'Brien, K., Hobbs, D. and Westmarland, L. (2009): Negotiating violence and gender: Security and the night time economy in the UK. In Body-Gendrot, S. and Spierenburg, P. eds. *Violence in Europe: Historical and Contemporary Perspectives*. New York: Springer, 161-176.

Pain, R., MacFarlane, R., Turner, K. et al. (2006): Qualifying GIS and the effects of streetlighting on crime and fear. *Environment and Planning A*, **38**: 2055-2074.

Painter, K. (1996): The influence of street lighting improvements on crime, fear and pedestrian street use, after dark. *Landscape and Urban Planning*, **35**: 193-201.

Pottie-Sherman, Y. and Hiebert, D. (2013): Authenticity with a bang: Exploring suburban culture and migration through the new phenomenon of the Richmond night market. *Urban Studies*, **52**: 538-554.

Rabinow, P. and Rose, N. (2006): Biopower today. *BioSocieties*, **1**: 195-217.

Roberts, M. (2013): A big night out: Young people's drinking, social practice and spatial experience in the 'liminoid' zones of English nighttime cities. *Urban Studies*, **52**: 571-588.

Roberts, M. and Eldridge, A. (2009): Planning, urban design and the night-time city: Still at the margins?. *Criminology and Criminal Justice*, **9**: 487-506.

Robinson, J. (2010): Cities in a world of cities: The comparative gesture. *International Journal of Urban and Regional Research*, **35**: 1-23.

Rutherford, S. (2007): Green governmentality: Insights and opportunities in the study of nature's rule. *Progress in Human Geography*, **31**: 291-307.

Sage, J., Smith, D. and Hubbard, P. (2013): New-build studentification: A panacea for balanced communities?. Urban Studies, **50**: 2623-2641.

Schwanen, T., Van Aalst, I., Brands, J. et al. (2012): Rhythms of the night: Spatiotemporal inequalities in the night-time economy. *Environment & Planning A*, **44**: 2064-2085.

Shaw, R. (2010): Neoliberal subjectivities and the development of the night-time economy in British cities. *Geography Compass*, **4**: 893-903.

Shaw, R. (2014): Beyond night-time economy: Affective atmospheres of the urban night. *Geoforum*, **51**: 87-95.

Shaw, R. (2013): 'Alive after five': Constructing the neoliberal night in Newcastle-upon-Tyne. Urban Studies, **52**: 456-470.

Sheard, L. (2011): 'Anything could have happened': Women, the night-time economy, alcohol and drink spiking. *Sociology*, **45**: 619-633.

Tadié, J. and Permanadeli, R. (2014): Night and the city: Clubs, brothels and politics in Jakarta. *Urban Studies*, **52**: 471-485.

Talbot, D. (2004): Regulation and racial differentiation in the construction of night-time economies: A London case study. *Urban Studies*, **41**: 887-901.

Talbot, D. (2007): R*egulating the Night: Race, Culture and Exclusion in the Making of the Night-Time Economy*. Aldershot: Ashgate.

Valentine, G., Holloway, SL. and Jayne, M. (2010): Contemporary cultures of abstinence and the nighttime economy: Muslim attitudes towards alcohol and the implications for social cohesion. *Environment and Planning A*, **42**: 8-22.

van Aalst, I., Schwanen, T. and van Liempt, I. (2014): Video-surveillance and the production of space in urban nightlife districts. In Van den Hoven, J., Koops, B., Romijn, H. et al. eds. *Responsible Innovation: The Ethical Governance of New and Emerging Technologies*. Dordrecht: Springer, 315-335.

van Liempt, I. and van Aalst, I. (2012): Urban surveillance and the struggle between safe and exciting nightlife districts. *Surveillance and Society*, **9**: 280-292.

van Liempt, I. (2013): Safe nightlife collaborations: Multiple actors, conflicting interests and different power distributions. *Urban Studies*, **52**: 486-500.

Williams, RW. (2008): Night spaces: Darkness, deterritorialization, and social control. *Space and Culture*, **11**: 514-532.